目次

第一講　演習問題⑴……p.2
第二講　演習問題⑵……p.8
第三講　演習問題⑶……p.14
第四講　演習問題⑷……p.20
第五講　演習問題⑸……p.26

第一講　演習問題(1)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

宇治に住む浮舟が、薫と匂宮という二人の貴公子に愛され悩んでいた。薫が浮舟を都へ迎えようとしていることを知った匂宮は、薫より先に浮舟を引き取ろうとした。そのような折、浮舟に仕える右近という女房が、浮舟に自分の姉をめぐる話を始めた。

「右近が姉の、常陸にて人二人見はべりしを、ほどほどにつけては、ただかくぞかし。これもかれも劣らぬ心ざしにて、思ひまどひてはべりしほどに、女は、今の方にいますこし心寄せまさりてぞはべりける。それにねたみて、つひに今のをば殺してしぞかし。さて我も住みはべらずなりにき。国にもいみじきあたら兵一人失ひつ。また、この過ちたるもよき郎等なれど、かかる過ちしたるものを、いかでかは使はんとて、国の内をも追ひ払はれ、すべて女のたいだいしきぞとて、館の内にも置いたまへらざりしかば、東国の人になりて、[注]ままも、今に、恋ひ泣きはべるは、罪深くこそ①見たまふれ。ゆゆしきついでのやうにはべれど、上(かみ)も下(しも)も、かかる筋のことは、思し乱るるはいとあしきわざなり。ア御命までにはあらずとも、

人の御ほどほどにつけてはべることなり。死ぬるにまさる恥なることも、よき人の御身には[a]なかなかはべるなり。一方に②思し定めてよ。[注]宮も御心ざしまさりて、まめやかにだに③聞こえさせたまはば、そなたざまにもなびかせたまひて、ものないたく嘆かせたまひそ。痩せおとろへさせたまふもいとやくなし。さばかり[注]上（うへ）の思ひいたづききこえさせたまふものを、ままがこの[注]御いそぎに心を入れて、まどひゐてはべるにつけても、[イ]それよりこなたに、と聞こえさせたまふ御ことこそ、いと苦しく[b]いとほしけれ」

（『源氏物語』より）

注　まま…乳母。浮舟の乳母。右近の母。
　　宮…匂宮。
　　上…浮舟の母上。
　　御いそぎ…薫が浮舟を都に迎えるご準備。

問一　傍線部ア・イの解釈として適当なものを、次の中からそれぞれ選べ。

ア
1　お命にまで及ばないのは、高位高官の人だけです。
2　お命も守れないことは、ご身分の高い人ほどよくあることです。
3　お命を捨てるまでもなく、どなたもほどほどになさるのが良いことです。
4　お命とひきかえに恥をすすぐことは、高貴な人ほどありがちなことです。
5　お命に関わるほどではなくても、どの身分でも男女の愛憎は起こるものです。

イ
1　匂宮よりも薫を選びなさい、とお勧めなさっている
2　乳母よりも浮舟の方が気がかりだ、と伝言しておられる
3　母上の方から、こちらにいらっしゃい、と仰っておられる
4　乳母よりも母上の言うことに従いなさい、とお話しておられる
5　薫に迎えられるより先に、匂宮が引き取ろう、と申しておられる

問二　傍線部ａ・ｂの単語の意味をそれぞれ答えよ。

ａ＝

ｂ＝

問三　傍線部①～③の主語は誰か。次の中からそれぞれ選べ。

1　浮舟　　2　右近　　3　右近の姉　　4　匂宮　　5　薫

①＝　　②＝　　③＝

問四　本文の内容に合致するものを、次の中から選べ。

1　右近の姉は、もとからの男のほうをより愛した。
2　右近の姉は、官舎から追放された。
3　殺された男の親類は、仇討ちをした。
4　三角関係は身分の低い者にありがちだ。

【練習問題】

① 次の傍線部の中から、「御前」の動作を示しているものを、後の中から選べ。

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを(ア)聞こしめしつつ、なやましう(イ)おはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御ありさまなどの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづね(ウ)参るべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ(エ)わすらるるにも、かつはあやし。

a アイ　b イウ　c ウエ　d アエ

② 「よき御兄弟をお持ちなされしは、まことに御果報いみじき御事ぞ」とはどのような意味か。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 私が良い兄弟を持ったのは、あなたにとってたいへんな幸せです。
イ あなたが良い兄弟をお持ちになったのは、私にとってたいへんな幸せです。
ウ あなたのような良い兄弟を私が持ったのは、私にとってたいへんな幸せです。
エ 私のような良い兄弟をあなたがお持ちになったのは、あなたのたいへんな幸せです。

③　次の傍線部の中から、動作の主体が他と異なるものを一つ選べ。

〜その時、郎等寄り来て、「今日はものさはがしく侍り。ア帰り給ひて、その用意して出家し給はば、よろしからん」と言ふに、イ腹立ちて、「おのれば許らひにては、我が思ひ立ちたることをば、いかで防げんとするぞ」とて、眼をいからして、太刀を引きまはせば、恐れをののきてウ立ちのきぬ。大方、今日の願主より始めて、ありとある人、色を失へり。近く居寄り、「只今、頭を剃れ。剃らでは悪しかりなん」と、しきりにエ責むれば、遁るべき方なくて、わななくわななく法師になしつ。衣・袈裟乞ひて、うち着てこれより西ざまに〜（中略）

かくしつつ、日を経て遥かにオ行き行きて、末に山寺ありけり。〜

第二講 演習問題(2)

光源氏との間に姫君をもうけた明石の君は、三歳になる姫君とともに、明石から、都の西、大堰（おおい）の山荘に移り住んだ。源氏が、自邸の二条院近くの東院に入るよう要請していたからである。明石の君は、月に二度ほど仏事にかこつけた源氏の訪問を受けているが、源氏は、自分と妻である紫の上のもとに姫君を引き取ることを考えていた。次の文章は、そのような源氏を明石の君が迎えたある日の場面である。よく読んで、後の問に答えよ。

冬になりゆくままに、川づらの住まひいとど心細さまさりて、上の空なる心地のみしつつ明かし暮らすを、*君も、「なほかくてはえ過ぐさじ。*かの近き所に思ひ立ちね」とすすめたまへど、[1]つらきところ多く試みはてむも残りなき心地すべきを、いかに言ひてかなどいふやうに思ひ乱れたり。「さらばこの若君を。かくてのみは便なきことなり。*思ふ心あればかたじけなし。*対に聞きおきて常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、*袴着のことなども、人知れぬさまならずしなさむとなむ思ふ」と、まめやかに語らひたまふ。さ思すらむ、と思ひわたることなれば、いとど胸つぶれぬ。

「あらためてやんごとなき方にもてなされたまふとも、[2]人の漏り聞かむことは、なかなかにやつくろひがたく思されむ」とて放ちがたく思ひたる、[3]ことわりにはあれど、「うしろやすからぬ方にやなどはな疑ひたまひそ。かしこには年経ぬれ

ど[4]かかる人もなきが、さうざうしくおぼゆるままに、＊前斎宮のおとなびものしたまふをだにこそあながちに扱ひきこゆめれば、ましてかく憎みがたげなめるほどを、おろかには見放つまじき心ばへに」など、女君の御ありさまの思ふやうなることも語りたまふ。

げに、いにしへは、いかばかりのことに定まりたまふべきにかと、伝（つて）にもほの聞こえし御心のなごりなく静まりたまへるは、おぼろけの御宿世にもあらず、[5]人の御ありさまもここらの御中にすぐれたまへるにこそは、と思ひやられて、[6]数ならぬ人の並びきこゆべきおぼえにもあらぬを、さすがに、立ち出でて、人も[7]めざましと思すことやあらむ、わが身はとてもかくても同じこと、生ひ先遠き人の御上もつひにはかの御心にかかるべきにこそあめれ、さりとならば、げにかう何心なきほどにや譲り［　　］まし、と思ふ、また、手を放ちてうしろめたからむこと、つれづれも慰む方なくては、いかがは明かし暮らすべからむ、何につけてかたまさかの御立ち寄りもあらむ、などさまざまに思ひ乱るるに、身のうきこと限りなし。

（『源氏物語』薄雲巻）

注　＊君…光源氏。
＊かの近き所…東院。

＊前斎宮…亡き六条御息所の娘。光源氏は養女として引き取っている。この時、二十二歳。紫の上は二十三歳。
＊袴着…ここでは、姫君が初めて袴を着ける儀式。
＊対…ここでは、紫の上をさす。
＊思ふ心…姫君を将来后にしたいという考え。

問一　傍線部1「つらきところ多く試みはてむも残りなき心地すべき」には、「宿かへて待つにも見えずなりぬればつらきところの多くもあるかな」という和歌がふまえられているが、この歌を参考にして解釈すると、この「心地」とはどのような「心地」と考えられるか。最適なものを次の①〜⑤から選べ。

①　光源氏からの転居の要請を断ってみても、大堰の地に長くは住んでいられないだろうという「心地」。
②　転居を続けるにつけても、これまで以上に悲しみを味わい尽くして絶望的になってしまうという「心地」。
③　自分と姫君についての結論を先延ばしにすることがむずかしく、決断までもう時間がないという「心地」。
④　光源氏の心を試してみても、長い将来を期待することができず、人生の晩年が近づいてきたという「心地」。
⑤　姫君を手元においた光源氏との駆け引きを続けるには、あとわずかの時間しか残されていないという「心地」。

問二　傍線部2「人の漏り聞かむこと」とあるが、その内容はどのようなことか。最適なものを次の①〜⑤から選べ。

①　明石の姫君の母親が、実は紫の上ではなく、明石の君であるということ。
②　光源氏が、むりやり明石の君と姫君を引き離すようなことをしたということ。
③　紫の上は、実は姫君をかわいがる気持ちがなく、冷たくしているということ。
④　光源氏が、姫君だけを大切にして明石の君を軽々しく扱っているということ。
⑤　光源氏と紫の上は、実は明石の君から強引に姫君を押しつけられたということ。

問三　傍線部3「ことわり」、7「めざまし」の意味として最適なものを、それぞれ次の①～⑤から選べ。

3「ことわり」

①　判断　②　道理　③　拒絶

④　躊躇　⑤　妥協

7「めざまし」

①　すばらしい　②　驚異的だ　③　満足だ

④　情けない　⑤　心外だ

問四　傍線部4「かかる人」と同じ人物を表わす語句を、この後の文中から抜き出せ（五字から八字）。

問五　傍線部5「人」、6「数ならぬ人」は、それぞれ誰を指すか。次の①〜⑤からそれぞれ正しいものを選べ。

5「人」

①　光源氏　②　紫の上　③　明石の君
④　明石の姫君　⑤　世間の人

6「数ならぬ人」

①　光源氏　②　紫の上　③　明石の君
④　明石の姫君　⑤　世間の人

問六　[　　]に入れるべき語として最適なものを次の①〜⑤から選べ。

①　おはし　②　たまは　③　たまひ
④　たまふ　⑤　きこえ

問七　本文の内容として、正しくないものを、次の①～⑤から一つ選べ。

① 光源氏は、前斎宮のことを引き合いに紫の上の世話好きな性格を伝え、明石の姫君を託してもけっして心配ではないと強調している。

② 光源氏が数多くの女性と付き合いながら、紫の上を重んじているのは、それだけ紫の上がすぐれているからだと、明石の君は思っている。

③ 光源氏は、明石の姫君の将来のため、できるだけ早く自分と紫の上のもとに姫君を引き取りたいと考え、明石の君を説得しようとしている。

④ 明石の君は、あくまで娘の将来を第一に考え、自分自身がどうなるかは宿世に任せるほかはないという、けなげな母親らしい決断を下している。

⑤ 明石の君が娘を光源氏に託す決断ができないでいるのは、一つには、娘と離れた場合、光源氏の訪問が途絶えることを懸念しているからである。

第三講　演習問題(3)

つぎの文章は、『松浦宮物語』の一節である。遣唐副使として渡唐した橘氏忠は唐帝に厚遇され、その崩御後は、幼い新帝と政務を補佐するその母后に忠義をつくした。官職に就いている氏忠は、先例により本来は帰国できないが、両親の待つ日本に帰ることを切望するようになり、それを知った母后はその功績に報い、氏忠の帰国を決定した。別れの日が近づき、名残を惜しむ三人の様子を描いた以下の場面を読んで、後の問いに答えよ。

六月(みなづき)十日余りにもなりぬ。暑さ[1]ところせきころ、政(まつりごと)はてぬるに、ことに疎き人もさぶらはず。帝(みかど)、后(きさき)、少しうち休ませたまふとて、水に臨みたる廊の、風涼しきかたにおはしますに、召しあれば参りて、土廂(つちびさし)の石の上に[A]さぶらふ。

「(幼帝)思ひしことなれど、むげに残りなき日数こそ、いまさらに言ふかひなき心地すれ」と涙ぐませ[B]たまへる、いとかたじけなく忍びがたきに、后も近うおはします。六月十日余り、暑く耐へがたき日の気色(けしき)を、薄き衣も暑かはしう、思ひ悩まぬ人なきころの、まばゆきまでくまなき空の気色に、常よりことに言ふよしなき御さま、かたちの、光を放つと言ふばかり、目も驚く心地するに、いささか暑げなる御気色もなく、みどりの空に澄み昇る月の影ばかりきよく、くまなき御さま、「この世に[a]かかることやはあるべき」と、あさましう言ふ限りなきに、ただ仏の御国の心地のみして、[2]なめげなれど、「目し

ばらくも」とかや、恐れも忘れてうちまもらるるにつけて、思ひ分かず、涙のみぞすすみ出づる。いまはただ、このとまらぬ道の恨み、なほかへすがへすも忘れがたき志(こころざし)を、のたまはせやらず、みなしほたれおはします。

「(幼帝)ことのついでありて、*鄭衛(ていゑい)の声を好まねど、礼楽の道捨つべきにはあらねば、聞き合はせまほしかりつる物の音をだに、*金石糸竹(きんせきしちく)をなべてやめたるころにて、くちをしうも過ぎぬるかな。なほ早き月日の一巡りをだに、待ち過ごさざりつる恨みなむ、なにの深さも忘れぬべかりける」とのたまはすれど、深く思へるところを違(たが)へじの御掟(おきて)なれば、いとぞかひなき。「(幼帝)なほこの度は、*待つ人もあながちに深き志背(そむ)きがたければ、頼みがたきあだの命なれど、*かのふたりののちまで、おのづから長らふる身ならば、いま一度は、思ひ立たれなんや。かくながら、惜しみとどめたらむよりも、それや深き志のほど知られん」とのたまはする御兼(か)ね言(ごと)も、涙にむせびて、え[c]聞こえやらず。

(橘氏忠)限りあらむ命を更に惜しみても[b]君の御言(みこと)をいかが忘れむ

(幼帝)これゆゑぞ我も命の惜しまれむただなほざりに頼めおくとも

「(幼帝)さらば長らふる身ともがな」とのたまはする御気色も、いとおよすげて、[3]けうらにぞおはします。

（『松浦宮物語』より。文章を一部改変した〔↑注：入試問題そのままです〕）

注
＊鄭衛の声　中国の春秋時代の鄭と衛という国の音楽を指す。人心を惑わすものとされていた。
＊金石糸竹をなべてやめたる　「金石糸竹」は音楽の意。先帝の崩御後、喪に服しているため、音楽をすべて禁止しているという意味。
＊待つ人　氏忠の帰国を待っている両親を指す。
＊かのふたりののち　「氏忠の両親の亡くなったあと」という意。

問一　傍線部１「ところせき」２「なめげなれど」３「けうらに」の本文中における意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選べ。

１「ところせき」
ア　やっかいである　イ　ぶり返す　ウ　過ごしやすい
エ　和らぐ　オ　連日続く

２「なめげなれど」
ア　呆然とするが　イ　清々しいが　ウ　落ち着かないが
エ　失礼であるが　オ　ありがたい気持ちになるが

３「けうらに」
ア　美しくて　イ　かわいらしく　ウ　おとなびて
エ　聡明で　オ　さびしそうで

問二　傍線部Ａ「さぶらふ」Ｂ「たまへ」Ｃ「聞こえやら」の敬語の種類として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選べ。

ア　尊敬語　　イ　謙譲語　　ウ　丁寧語

Ａ＝　　Ｂ＝　　Ｃ＝

問三　二重傍線部ａ「かかることとやはあるべき」を現代語訳し、三十五字以内で解答欄に記せ。その際、「かかる」が何を指しているかを明確にすること。なお、読点や記号も一字と数える。

問四　波線部「いとぞかひなき」とあるが、なぜどうすることもできないのか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選べ。

ア　氏忠がいくら両親への思いを深くしても、先例により、すぐには帰国できないから。

イ　母后の、帝に対する愛情を尊重して定められた規則なので、臣下である氏忠には反論する余地はないから。

ウ　「氏忠と音楽が聴きたい」と帝が強く願っても、亡き父帝の喪に服する決まりに違反することはできないから。

エ　どれほど母后に恋い焦がれても、身分が違うので、氏忠の思いが叶うことは絶対にありえないから。

オ　氏忠の帰国は、彼の強い願いを汲んでそれに背くまいと、母后が取り計らわれたことだから。

問五 二重傍線部ｂ「君の御言」の内容として、最も適切なものをつぎの中から選べ。

ア 氏忠の功労は一生忘れないよ。
イ 再び唐に来ると決心なさらないか。
ウ 帰国について、もう一度考え直してください。
エ 帰国後は、以前のように、また両親に孝行をつくしておくれ。
オ 唐と日本に離れても、ともに長生きをし、互いに忘れないようにしましょう。

問六 『松浦宮物語』を著したとされている藤原定家は勅撰和歌集の撰者でもある。つぎの中から勅撰和歌集ではない歌集を一つ選べ。

ア 千載和歌集　イ 後撰和歌集　ウ 古今和歌集
エ 金槐和歌集　オ 新古今和歌集

第四講 演習問題(4)

次の文章は大江匡房の談話を藤原実兼が筆録したものである。これを読んで、あとの問に答えよ。

語られて云はく、「村上の御時、「宮鶯暁の光に囀(さへづ)る」の題の詩に、文時三品(ふみときさんぼん)を召して講ぜしめられしに、[1]その間の物語は知らるるか、いかん」と。答へて云はく、「知らず」と。語られて云はく、「尤も興有ることなり。件(くだん)の日は村上と文時と相互に相論の日なり。[2]件の御製に云はく、「露濃やかにして緩く語る園花の底。月落ちて高く歌ふ御柳の陰」と作らしめ給ふを、文時、「西楼に月落ちて花の間の曲。中殿に灯残って竹の裏の[3]音」と作りたりければ、主上聞こしめして、「我こそ[4]この題は作り抜きしたれと思ふに、文時の詩またもつて神妙なり」と仰せられて、文時を召し、御前に近づけて、「偏頗なく我が詩の事、憚りなく難の有無を申せ」と仰せらるるに、文時申して云はく、「御製神妙に侍り。ただし、[5]下の七字は文時が詩にもまさらせたまひたり。『御柳の陰』なれば、宮と思え候ふに、上の句は、いづこに宮の心は作らしめおはするにか候ふらむ。園は宮にのみやは候ふ［A］」と申すに、村上の仰せらるるやうは、「足下は知らぬか。その園は我が

園ぞかし」と仰せらるるに、文時申して云はく、「しかこそ侍るなれ。上林苑（注）の心にこそ侍るなれ。しかりといへども、いかが侍るべからむ」と申すに、「尤も謂れ有り」と仰せらるるに、ひとり問答して云はく、「また興有る仰せ事あり」と云ひて、「さこそは侍りなん」とア申して座を退かんとするに、主上また仰せらるるやう、「しからば、我が詩と足下の詩と勝劣はいかん。慥（たし）かに差し申すべし」と仰せらるるに、文時申して云はく、「御製は勝（まさ）らしめ給ふ。尤も神妙なり」とイ申すに、主上仰せらるるやう、「よもしからじ。慥かになほ申すべきなり」と仰せられて、蔵人頭をウ召して仰せらるるやう、「もし文時この詩の勝劣を申さず、実に依りて申さしめずは、今より以後、文時の申す事、我に奏達すべからず」と仰せらるるをエ聞きて、文時申して云はく、「実には御製と文時が詩と対座に御座（おは）す」と申すに、「実に誓言を立つべし」と仰せらるるに、また申して云はく、「実には文時が詩は今一膝上りて侍り」と申して、オ逃げ去り了んぬ。主上感歎せしめ給ひて、啼泣し給ふ」と云々。

（『江談抄』より）

注　上林苑…長安の西にあった御苑。秦の始皇帝が創建し、漢の武帝が拡張増設し、広大な規模を有した。

問一　傍線部1「その間の物語」の指すこととして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　村上が文時との対面時に蔵人頭を呼び出したこと。
イ　村上が文時との対面の最中に退席したこと。
ウ　村上と文時との詩についての問答の様子。
エ　村上が文時に語った政治の話。
オ　文時が村上に申した政策。

問二　傍線部2「件の御製」とは何を指すか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　村上の作った和歌。
イ　文時の作った和歌。
ウ　文時の立てた誓言。
エ　村上の作った詩。
オ　文時の作った詩。

問三　傍線部3「音」とあるが、この「音」はどこから発するものか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　琵琶　　イ　鶯　　ウ　竹　　エ　柳　　オ　人

問四　傍線部4「この題は作り抜きしたれ」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　この題のものはいくつか古人の作品から書き抜いたものがある。
イ　この題の作品については以前見たことがある。
ウ　この題の作品は前から作り置いてあった。
エ　この題の作品は今まで作らないで来た。
オ　この題では抜群の作品を作った。

問五　傍線部5「下の七字」が指す語句の初めの一字と終りの一字とを記せ。

初め＝　　　終り＝

問六　空欄Aに入る最も適切な語を、次の中から一つ選べ。

ア　めり　　イ　こそ　　ウ　ぞ　　エ　べき　　オ　はず

問七　傍線部ア〜オの中で、一つだけ他と主語が違うものがある。その記号を選べ。

問八　次のア〜オの中に一つだけ本文の内容と合致しないものがある。その記号を選べ。

ア　村上は初め自分の作品が文時のものよりも優れていると思っていた。
イ　文時は村上の作品と自分のものとが互角の出来栄えだと考えていた。
ウ　文時は終始自分の作品が村上のものより少しは上だと思っていた。
エ　文時は村上の作品の前半が題から逸脱していると考えていた。
オ　村上は自作の中の「園」は宮廷の庭だと考えていた。

第五講　演習問題(5)

次の文章は、『落窪物語』の一節である。中納言の姫君（落窪の君）は、実母が亡くなり、父中納言に引き取られたが、継母から嫌われ、床の落ちくぼんだ部屋に住まわせられていた。その姫君のもとに中将が通いはじめ、やがて姫君は中将邸に妻として引き取られて、幸福な生活を送っていた。ところが、中将と右大臣家の姫君との縁談が持ちあがり、中将はその縁談を断ったにもかかわらず、中将の乳母が勝手に話を進めてしまった。以下の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

御乳母出で来て言ふやう、

「かの（注1）右の大殿のことは、のたまひしやうにaものし侍りしに、『わざとやむごとなき妻にものし給はざなり。時々通ひてものし給へかし。（注3）殿に聞こえて、四月となむ思ふ』とbいそがせ給ふなり。さる心し給へ」と聞こゆれば、cいと恥づかしげに笑みて、「Aなでふ、男の否と思ふことを、強ひてするやうかはある。世の人に似ず、よき身にもあらねば、さのたまふ人もあらじ。（ア）かかることなまねび給ひそ。（注4）かたはなり。わざとの妻にもあらざなりとは、いかで知り給ふ。（注5）いとさ言ふばかりなき人にもあらぬを」とのたまへば、乳母、

「（イ）あなわりな。（注6）大殿（おとど）も、しかと思（おぼ）し立ちて、いそぎ給ふものをば。よし、御覧ぜよ。やむごとなき人の強ひてのたまはむことをば、いかがはせさせ給はむ。何かは。君達（きんだち）は、はなやかに（注7）御妻方（めがた）のさしあひてdもてかしづき給ふこそ今めかしけれ。思（おも）ほす人ありとても、それをばさるものにて、御文など奉り給へ。（注8）かの君も思ふ時は、上達部（かんだちめ）の女（むすめ）にはあなれど、落窪の君とつけられて、中の劣りにて、（注9）うちはめられてありけるものを、かく類（たぐひ）なく、e思しかしづくこそあやしけれ。人は、かたへは父母（ちちはは）ゐたちてかしづかるるこそ心にくけれ」と言ふに、中将面（おもて）うち赤めて、

「古めかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしきことも欲しからず、おぼえも欲しからず、父母具したらむをともおぼえず。落窪にもあれ、上（あが）り窪にもあれ、忘れじと思はむをば、いかがはせむ。人の言はむも多く、そこにさえBかくのたまふこそ心憂けれ。（注10）ただ御為（ため）に志なきに思すとも、今かれもつかうまつるやうありなむ」とて、いと頼もしげなるけしきにて立ち給ふめるを、（注11）帯刀（たちはき）つくづくと聞きて、C爪弾（つまはじき）をはたはたとして、

「なでふ、かかること申し給ふ。（注12）君と申しながらも、（ウ）恥づかしげにおはすとは見奉らずや。ただ今の御仲は、（注13）人放ちげにもあらぬものを。かののたまひつるやうに、志たがはず、（注14）はなやかなる方にやり奉りて、御徳見むと

思したるか。あな心憂。少しよろしき人の、さる心持たるやはある。なでふ(注15)御名だての落窪ぞ。老いひがみ給ひにけり。これをかのあたりに聞き給ひて、いかが思すべき。今よりかかることのたまふな。君の思したることいと恥づかしくいとほし」と言ふ。

(注)

1 右の大殿のこと――中将と右大臣家の姫君との結婚話を指す。
2 ものし――ここでは、縁談を断る、の意。
3 殿――中将の父、大将。
4 かたはなり――不都合だ。
5 いとさ言ふばかりなき人にもあらぬを――落窪の君はれっきとした妻になる身分ではない方だ、とは言い切れないのに。
6 大殿――中将の父、大将。
7 御妻方のさしあひて――妻の実家の後ろだてが加わって。
8 かの君も思ふ時は――落窪の君のことを考えてみるに。
9 うちはめられて――自由を奪われて。
10 ただ御為に志なきに思すとも、今かれもつかうまつるやうありなむ――落窪の君があなたに何も尽くしていないとお思いになるでしょうが、そのうちお尽くし申し上げることもあるでしょう。
11 帯刀――惟成。乳母の子で中将の従者。
12 君――養い君。中将を指す。
13 人放ちげにもあらぬものを――他人がひきはなすことができそうもないのに。
14 はなやかなる方にやり奉りて、御徳見む――勢力のある右大臣の姫君と結婚させ申し上げて、恩恵にあずかろう。
15 御名だての――人聞きの悪い。

問1 傍線部（ア）～（ウ）の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（ア） かかることなまねび給ひそ
① このようなことは心におかけなさいますな
② このようなことを心におかけになるとよいでしょう
③ このようなことはそっくり取り次いでおっしゃいますな
④ このようなことはまねなさいますな
⑤ このようなことをまねなさるとよいでしょう

（イ） あなわりな
① まあ仕方がない　② なんと理不尽な　③ とても不可能だ
④ ああすばらしい　⑤ ひどくつらい

（ウ） 恥づかしげに
① 立派な様子で　② 恥さらしな様子で　③ 気がひける様子で
④ 面目なさそうに　⑤ きまりが悪そうに

問2 波線部a～eのうち、主語の同じものが二つある。その組合せとして適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① a「ものし侍りしに」とb「いそがせ給ふなり」
② a「ものし侍りしに」とd「もてかしづき給ふこそ」
③ b「いそがせ給ふなり」とc「いと恥づかしげに笑みて」
④ c「いと恥づかしげに笑みて」とe「思しかしづくこそ」
⑤ d「もてかしづき給ふこそ」とe「思しかしづくこそ」

問3 傍線部A「なでふ、男の否と思ふことを、強ひてするやうかはある」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① どうして、男がいったんいやだと思った縁談を、すすんで受け入れることがあろうか。
② 何ということだ、男が恥と思っているのに、身分違いの結婚を強いるなんて理不尽ではないか。
③ どうして、男の気のすすまない縁談を、意に背いて強引にすすめる必要があるのか。
④ 何ということだ、男の反対を逆手にとって、無理に破談に持ち込むなんてひどいではないか。
⑤ どうして、男というものは、条件のいい配偶者をかたくなに拒否するのか、理解できないことだ。

問4　傍線部Ｂ「かくのたまふ」の内容の説明として最も適当なものを、次の①〜⑥のうちから一つ選べ。

① 右大臣が、中将にとって身近な存在である乳母を取りこみ、乳母を介して自分の娘との結婚話を持ちこんだこと。
② 右大臣が、中将の父大将との政治的な取引や中将の将来の出世を絡めて、強引に自分の娘との結婚を促したこと。
③ 右大臣が、落窪の君の存在などとるに足らないと無視して、乳母の意向を汲んで自分の娘との結婚話を進めたこと。
④ 乳母が、両親に大切に育てられ、しかも実家の経済的支援が期待できる右大臣の姫君との結婚を勧めたこと。
⑤ 乳母が、打算的な考えから、中将の意向を無視して、右大臣の姫君との結婚と、落窪の君との離縁を勧めたこと。
⑥ 乳母が、落窪の君の素姓や以前のみじめな境遇に触れ、中将の正妻としてふさわしくないと、離縁を促したこと。

問5　傍線部Ｃ「爪弾をはたはたとして」には帯刀のどのような心情が示されているか。その説明として最も適当なものを、次の①〜⑥のうちから一つ選べ。

① 自分の母である乳母の意見に従おうとしない中将のかたくなさに不快感を抱いている。
② 自分の母である乳母が中将の気持ちを無視して話を進めようとしているのに対して腹立たしさを感じている。
③ 自分の母である乳母の考えは古風だと感じ、同世代である中将の当世風の考え方にむしろ共感を覚えている。
④ 自分の母である乳母の立場もあるが、仕えている中将への義理も果たさなければならず、思い悩んでいる。
⑤ 自分の母である乳母の当世風の考え方も、中将の古風な考え方も、どちらにも一理あると思っている。
⑥ 自分の母である乳母の方が、若い中将よりもかえって当世風の割り切り方をしているのに驚いている。

問6　乳母と中将の結婚に対する考え方の食い違いを説明するものとして最も適当なものを、次の①〜⑥のうちから一つ選べ。

① 乳母が愛情の深い妻のほかに経済力のある妻を持つべきだと主張したのに対して、中将は落窪の君も経済力を備えていると強調した。

② 乳母が実家の後ろ盾のない落窪の君とはきっぱりと別れて自分の勧める姫君と結婚するほうが出世できると主張したのに対して、中将は落窪の君への愛情が出世よりも重要だと主張した。

③ 乳母が権門の姫君との結婚がもたらす経済的な利益を強調したのに対して、中将は落窪の君も権門の姫君であることを主張し、落窪の君との結婚を正当化した。

④ 乳母が貴族の子弟は身分の高い妻をたくさん持つべきだと主張したのに対して、中将は自分が多くの妻を持てるほど身分が高くないので一人の妻しか持てないと反論した。

⑤ 乳母が貴族の子弟は親の勧める相手と結婚すべきだと主張したのに対して、中将は落窪の君との結婚は親の了承を得た正式なものであると反論した。

⑥ 乳母が貴族の子弟は妻の父母の援助を受けて大事にされるのがよいと主張したのに対して、中将は妻に対する愛情こそが重要だと主張した。

模範解答

第一講

〈模範解答〉

問一　ア　5　イ　5

問二　a　かえって　b　気の毒だ

問三　①　2　②　1　③　4

問四　2

〈現代語訳〉

（右近が浮舟に言うことには）「私の姉が、常陸国で男二人と交際しましたが、（どんな人でも）身分に応じて、このような（複数の交際が起こる）ものなのですね。こちらの男もあちらの男も劣らない愛情で、思い迷っておりましたが、姉は、後から言い寄ってきた男のほうに少し気持ちが傾いておりました。（もとからの男は）それを妬んで、ついに後から言い寄った男を殺してしまったのです。それから自分も住んでいられなくなりました。国にとってもたいそう惜しい武士一人を失った。また、この過ちを犯した男もすばらしい家来なのだが、このような過ちを犯した者を、どうして使うことができようか（、いや、できない）ということで、国内から追い払われ、すべては女が軽率だからだといって、館の中にも置いてくださらなかったので、（姉は）東国の田舎人になって、乳母〔＝私の母〕も、いまだに、恋しがって泣いておりますのは、罪深いことだと（私は）見ております。縁起でもない話のついでのようでございますが、身分が上の人も下の人も、このような（男女関係の）方面のことは、お迷いになるのはとてもよくないことである。お命に関わるほどではなくても、どの身分でも男女の愛憎は起こるものです。死ぬことにもまさる恥であることも、貴い身分の御方にはかえってございます。（薫か匂宮か）一方にお心をお決めなさいませ。匂宮もご愛情が（薫よりも）まさって、真剣にお申し込みくださるのでさえあれば、そちらの方にお心を決めなさって、あまりお嘆きなさいますな。（お悩みになって）痩せ衰えなさるのはたいへんかいがない。あれほどあなたの母上様

が（あなたを）ご案じ申し上げなさっているのに、乳母〔＝私の母〕が（薫があなたを都に迎えるということで、あなたが薫のもとに移る）ご準備に余念が無く、大騒ぎしておりますのにつけても、薫に迎えられるより先に、匂宮が引き取ろう、と申し上げなさっていることが、とても苦しく気の毒だ。」

【練習問題】

①　a　　②　エ　　③　ウ

第二講

〈模範解答〉

問一　②
問二　①
問三　3 ②　7 ⑤
問四　生ひ先遠き人（六字）
問五　5 ②　6 ③
問六　⑤
問七　④

〈現代語訳〉

冬になってゆくにつれて、川のほとりの住まいはますます心細さがつのって、あてのない感じばかりしながら（明石の君が）日々を過ごすのを、光源氏も、「やはりこのままでは暮らしていけないだろう。例の（二条院に）近い所〔＝東院〕に（移ることを）決心してしまいなさい」とすすめなさるけれど、（住まいを変えて待っても源氏は訪ねてきてくれなくなってしまうのだから、そんな）恨めしい住まいをたくさん試しつくしてしまうとしたらそれも後がない絶望的な気持ちがするに違いないので、（その時は）どのように言って（恨んだらよいのか）などというように（明石の君は）思い乱れている。（源氏は）「それならばこの若君〔＝姫君〕を（引き取らせてほしい）。（こんなところで）こうしてばかりでは不都合なことである。（姫君を将来后にしたいと）思う気持ちがあるので（このままでは）恐れ多い。紫の上も承知していて（姫君に）いつも会いたがっているので、しばらく近くで慣れさせて、袴着のことなども、人に知られない様子ではなく（盛大に）したいと思う」と、真剣に相談なさる。そのように（源氏は）お思いになっているだろう、とずっと思っていることなので、（明石の君は）ますま

す胸がしめつけられた。

（明石の君が）「（姫君が）今さらのように高貴な方に扱われなさるとしても、（姫君の実母は紫の上ではなく、私のような身分の低い者だと）人が漏れ聞くようなことは、かえってとりつくろえないと自然とお思いになるかもしれない」と思って（姫君を）手放せないと思っているのは、道理ではあるけれど、「安心できない方であろうかなどとはお疑いなさるな。あちら〔＝紫の上〕には何年も経ったけれどこういう人〔＝姫君（のような子）〕もいないのが、物足りなく思われるので、前斎宮が大人になっていらっしゃるのをさえ無理にお世話申し上げているようなので、ましてこの（姫君のように）憎めなさそうな年齢（の子）を、おろそかには見捨てることのできない性分で」などと、（源氏は）女君〔＝紫の上〕のご様子が望みどおりであることも話しなさる。

（明石の君は）「なるほど、かつては、どれほどのこと（があればその女性のもと）に落ち着きなさるつもりであろうかと、人づてにもうすうす耳にした（源氏の好色な）お心がすっかり静まりなさっているということは、（源氏と紫の上との関係が）並々のご宿縁でもなく、（紫の上の）人柄のご様子も多くの（女性たちの）中で際立ちなさっているのであろうよ」、と自然と推測されて、「物の数ではない人（である自分）が（紫の上と）肩を並べ申し上げることができる寵愛（を源氏から受けるの）でもないのに、そうはいってもやはり、のこのこ出て行って、その人〔＝紫の上〕も心外だとお思いになることがあるかもしれない、私自身（の身分が低いこと）はどちらにしても同じこと、将来が長い人〔＝姫君〕のご境遇も結局はあの（紫の上の）お気持ちにかかっているに違いないのであるようだ、そうだとするならば、本当にこのように物心もつかないうちに（姫君を紫の上に）譲り申し上げたらよいだろうか」と思う、その一方で、「（姫君を）手放して気がかりであろうこと、（姫君がいなくなって）所在なさも慰める方法がなくては、どうやって日々を過ごしたらよいのだろう（、いや、過ごしていけない）、（姫君がいなくなれば）何を理由にして（源氏の）まれまれのお立ち寄りもあるだろうか（、いや、なくなるだろう）」などとあれこれ思い乱れるので、我が身のつらいことは際限がない。

第三講

〈模範解答〉

問一　1　ア　2　エ　3　ア

問二　A　イ　B　ア　C　イ

問三　月が放つ光のように美しい人がいるだろうか、いや、いるはずがない。（三十二字）

問四　オ

問五　イ

問六　エ

〈現代語訳〉

　六月十日過ぎにもなった。暑さがやっかいな頃、政務は終わったが、特に疎遠な人もお仕えしていない。帝と后は、少しお休みになるというので、水に面した回廊の、風が涼しく吹くところにいらっしゃるが、お呼びがあったので（氏忠は）参上して、土廂の石の上にお控えする。帝は、「（以前から）分かっていたことであるが、ひどく残すところのない日数が、今改めて言いようがない気持ちがする」と涙ぐみなさったのが、とてももったいなく（涙を）こらえかねていると、后も近くにお出ましになる。六月十日過ぎ、暑く堪えがたい日の様子を、薄い衣も暑苦しく、思い悩まない人もいない頃の、まばゆいほど曇りのない空の様子に、普段よりも特に言いようのないご容姿、ご容貌が、光を発するというぐらい、目も覚める気持ちがして、少しも暑そうなご様子もなく、青空に澄み昇る月の光ほどに清らかに、曇りのないご様子は、「この世にこのように美しい人がおられることがあろうか」と、驚きあきれて言葉で言いようもないが、まるで仏の御国にいるような気持ちばかりがして、失礼であるが、「目を瞬時も（離さない）」とか言うように、恐れ多さも忘れてついじっと見てしまうにつけて、思慮分別も忘れて、涙ばかりがひとりでに流れ出る。今はただ、この留めようのない（氏忠の帰国の）旅への恨めしさ、それでもやはり本

当に忘れ難い忠誠の念を、言い終わりもなさらず、皆涙を流していらっしゃる。

帝は、「物事には順序があって、（私は）鄭衛の音楽を好まないが、礼儀、音楽の道理は放置してよいことではないので、（そなたと）一緒に聞きたかった音楽をさえ、喪に服しているため音楽をすべて禁止しているころで、残念なことに（音楽とは無縁で）過ぎてしまったよ。それでもやはり早く月日が（過ぎて）一巡するのをさえ、待って過ごしてくれなかった恨めしさは、（そなたの）どんな気持ちの深さも忘れてしまいそうだよ」とおっしゃるけれども、（氏忠が）深く願っていることに背くまいとの（母后の）ご決定なので、本当にどうしようもない。「やはり今度の帰国は、氏忠の帰国を待つ両親もひたむきに深い愛情を寄せていて背きがたいので（そのまま帰国するとして）、頼りにならないはかない命ではあるが、氏忠の両親が亡くなったあとまで、たまたま生きながらえる身であるならば、もう一度、（唐に来ると）決心なさらないか。このままで、別れを惜しんで引き留めているよりも、その方が深い誠意の程が知れよう」とおっしゃるお約束の言葉も、涙にのどを詰まらせて、お返事を申し上げきれない。

限りあらむ…＝寿命の定まっている命をさらに惜しんでも、（もう一度唐に来いとの）帝のお言葉をどうして忘れましょうか。

これゆゑぞ…＝そなたの言葉ゆえに私も命が惜しまれるだろう。ただたとえいいかげんな約束だとしても。

帝が、「それでは、お互い長生きの身でありたいことよ」とおっしゃるご様子も、とても大人びて、美しくていらっしゃる。

第四講

〈模範解答〉

問一　ウ
問二　エ
問三　イ
問四　オ
問五　初め…月　　終り…陰
問六　エ
問七　ウ
問八　イ

〈現代語訳〉

（大江匡房が）語られて言うことには、「村上天皇の御代、『宮鶯暁の光に囀る』という題の詩に、（天皇が）菅原文時をお呼びになって漢詩を読みあげさせなさったが、その時の話は知っておられるか、どうか」と。（私〔＝藤原実兼〕が）答えて言うことには、「知りません」と。（大江匡房が）語られて言うことには、「たいそう興味深いことである。その日は村上天皇と文時とが互いに相手の詩を論じられた日である。その時の村上天皇がお作りになった詩に言うことには、『露濃やかにして…＝明け方露がひどく降りて、鶯は宮中の庭園の花の中でゆっくりとさえずり、月が沈むと御苑の柳の陰で高やかに歌っている』とお作りになったが、文時は、『西楼に月落ちて…＝明け方に西楼に月は沈んで、鶯は花の間に歌い、中殿になお灯火が消え残る時、庭の竹の中で鳴いている』と作ったので、天皇は（これを）お聞きになって、『私こそこの題では抜群の詩を作ったと思うのに、文時の詩もまたすぐれている』とおっしゃって、文時をお呼びになり、お側に近づけて、『公平に私の詩のことを、

遠慮なく欠点があるかないかを申せ』とおっしゃるので、文時が申し上げることには、『帝の作られた詩はすぐれております。あるいは、下の七字では私、文時の詩よりもまさっていらっしゃいます。『御柳の陰』ですから、宮中と思われますが、上の句は、どこに（詩題の宮鶯の）宮という意味を（こめて）お作りになったのでしょうか。園は宮中にだけあるのでしょうか』と申し上げるので、村上天皇がおっしゃることには、『おまえは知らないのか。その園は私の園（すなわち宮中の園）だよ』とおっしゃるので、文時が申し上げるには、『そうでございましょう。上林苑の気持ちでございましょう。そうだとしても、（園は）どうでしょうか』と申し上げるので、（天皇は）『十分な根拠があるのだ』とおっしゃるので、（文時は）ひとりごとに、『また興味あるお言葉だ』と言って、『そうでございましょう』と申し上げて席を退こうとすると、天皇がまたおっしゃることには、『それならば、私の詩とおまえの詩と優劣はどうか。はっきりと申すがよい』とおっしゃるので、文時が申し上げるには、『帝の作られた詩がまさっていらっしゃいます。たいそうすぐれております』と申し上げると、天皇がおっしゃることには、『まさかそうではないだろう。もっとはっきりと申すがよい』とおっしゃって、蔵人頭をお呼びになっておっしゃることには、『もし文時がこの詩の優劣を申さず、本当のことを申させないならば、今後は、文時の申すことを、私に取り次いではならない』とおっしゃるのを聞いて、文時が申し上げることには、『本当は帝の作られた詩と文時の詩とは対等でいらっしゃいます』と申し上げるので、また申し上げることには、『本当は文時の詩は（帝の作られた詩よりも）一段上にあります』と申し上げて、逃げ去ってしまった。天皇はこれに嘆き悲しみなさって、声を上げてお泣きになった」と語られたのである。

第五講

〔模範解答〕

問1　（ア）③　（イ）②　（ウ）①
問2　④
問3　③
問4　④
問5　②
問6　⑥

〔現代語訳〕

乳母が出て来て言うには、
「あの右大臣様のこと〔＝中将と右大臣家の姫君との結婚話〕は、（あなた〔＝中将〕が）おっしゃったように縁談を断りましたが、『（今の妻〔＝落窪の君〕は）正式な高貴な身分の妻ではいらっしゃらないようだ。（今の妻には）時々お通いなさいませ。殿〔＝中将の父である大将〕に申し上げて、四月に（自分の娘と結婚をさせよう）と思う』と（右大臣は）せかしていらっしゃるのだ。そういうお心づもりをなさってください」と（中将に）申し上げると、（中将は）たいそう恥ずかしそうに笑って、「どうして、男がいやだと思っていることを、強いてするようなことがあろうか〔＝どうして、男の気のすすまない縁談を、意に背いて強引にすすめる必要があるのか〕（いや、ない）。（私は）世間の人と違って、よい身分でもないから、そのように（婿にしたいと）おっしゃる人もいないだろう。このようなことをそっくり取り次いでおっしゃいますな。不都合だ。正式な妻ではないようだとは、どうして（右大臣は）ご存知なのか。落窪の君はれっきとした妻になる身分ではない方だ、とは言い切れないのに。」とおっしゃるので、乳母が、「なんと理不尽な。大殿〔＝中将の父である大将〕もそのようにとお思いになって、（右

大臣の方でも）用意なさっているのになあ。まあ、ご覧ください。高貴な方が強いておっしゃることを、どのようにしなさるのでしょう〔＝どうしてお断りできるでしょう〕。何も（問題）ないです。公達は、華やかに妻の実家の後ろだてが加わって（妻の実家側が）大切にお世話しなさることが今風だ。思っている〔＝愛している〕人がいたとしても、それはそれとして、お手紙など差し上げなさいませ。落窪の君のことを考えてみるに、上達部〔＝三位以上の人、および四位の参議〕の娘ではあるようだが、落窪の君とあだ名をつけられて、（姉妹の）内でも劣っていて、自由を奪われていたのに、このように比べる物もないくらいに、（中将が）思いなさり大切にお世話するのが不思議だ。姫君は、一方では父母が座ったり立ったりして大切に育てるのが奥ゆかしい」と言うと、中将は顔を赤くして、「（自分は）古風な心だからであろうか、今風で風流なことも欲しくなく、評判も欲しくなく、父母がそろっている（姫君）をとも思わない。落窪にせよ、上り窪にせよ、忘れまいと思うようなのを、どうしようか（いや、どうしようもない）。他人がそう言うことも多く、あなたにまでこのように〔＝経済的支援が期待できる右大臣の姫君との結婚を勧めるようなこと〕おっしゃるのは情けない。落窪の君があなたに何も尽くしていないとお思いになるでしょうが、そのうちお尽くし申し上げることもあるでしょう」と言って、たいそう頼りがいのある様子で立ちなさったようなのを、帯刀〔＝乳母の子であり、中将の従者〕はよくよくじっくりと聞いて、爪弾をぱちぱちとして、「（母上は）どうして、このようなことを申し上げなさるのか。養い君〔＝中将のこと〕とは申しながらも、（こちらが恥ずかしくなるくらい）立派な様子でいらっしゃるとは見申し上げないのか。今の（中将と落窪の君との）御仲は、他人がひきはなすことができそうもないのに。あの右大臣様がおっしゃるように、お気持ちに違えず、勢力のある右大臣の姫君と結婚させ申し上げて、恩恵にあずかろうとお思いになったのか。ああ情けない。少しでも悪くはない〔＝普通の〕人は、そのような考えを持つだろうか、いや、持たない。どうして人聞きの悪い落窪（などと言うの）か。（母上は）年老いてひねくれなさった。これを女君〔＝落窪の君〕がお聞きになって、どのようにお思いになるだろう。今からこのような事はおっしゃるな。中将様がお思いになっていることもたいそう恥ずかしくなるほどいじらしい」と言う。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。